龍の契約

RAM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
龍の契約

【Ｎコード】
Ｎ１４２５Ｚ

【作者名】
ＲＡＭ

【あらすじ】
治療した黒龍と暮らしていた少し変わった薬師のリーゼ。黒龍は叱りつけたいほどの美少年。けれど、誇り高き黒龍を思うが故に別れを告げる。しかし、彼はリーゼが思っていたように子供などではなかった……！「え、えろがき……っ！」「貴女は、私のものだ。」
短編のはずが１万字…、とりあえず完結。この後ウェズ目線入れ。ムーンさんには甘甘で何話か作ろうと計画中。

1（前書き）

初めての完結作品。

1

「もう、だからその話はもう終わりって、言ってる、で、しょ！」

ぼふん、と気持ちいいほど綺麗に土から抜けた。地面に尻餅をつく前に何かが飛び込んできたようだけど、そんなの気にしていられない。

思わずほおずりしたくなるほど大きく立派でまっすぐなシンメノリーの根っこ。

太陽にかざすと、誇らしげに胸を張っているようにさえ見える。

私は興奮と喜びで叫び出しそうになっていた。

ああ、なんて素晴らしいの！

想像以上だわ！

昼も夜も2時間ごとにコップ一杯水をあげ続けなくては枯れてしまうデリケートな超高級材料。

この1年、お肌の大敵睡眠不足を承知で育てただけあって、これほどのものを買うには軽く王都に豪邸を買うほどの値段よりも高い。

この根っこを引き抜く瞬間を、私は何度夢に見たことだろう！

今朝起きてからこの瞬間のシミュレーションを138回ほどしたけれど、そのどの時よりもスムーズに美しく抜くことが出来たのは

間違いない。

ああ、もう一度埋めてもう一回抜くことにしよう！

そうでないと、今夜眠れない気がする！

いそいそと立ち上がろうとした私は、地面に手をついて立ち上がろうとしてその感触に驚いた。

なにこれ、堅い。

思わず眉を寄せて見ると、右手は龍の頭の上にあった。

その下から金色の目が不機嫌そうに私を睨みつけている。

そういえば、さっきまで話していたんだっけ。

あまりの根っこのすばらしさに一気に頭から抜けていた。

ぱすぱすと長いしっぽが地面を打っている。

かなりご不満がたまっているらしい。

「なによ、その顔。ウェズは力が強すぎで綺麗に抜く事なんて無理だって言ったでしょ。あきらめなさい。」

「べつにそんなこと望んでいない。」

むすっとした声。

世界で最も誇り高き龍の中でも、頂点に位置するという黒龍。

子供とはいえ、その黒龍をお尻の下に敷いたまま話す私。

世の人がみたら卒倒するわね。

私は苦笑してから立ち上がった。

「ほら、人型になって。私シンメノリーの処理しておくから、じゃがいもとかも収穫して家に持って帰ってきてよ。」
シンメノリーは収穫してすぐ処理しないと、鮮度が落ちてしまうのだ。

「だから、何度袋を持ってこいと言えば分かるんだ。」
じゃがいもをそのまま持って帰るのは難しいんだぞ、と言いながらも光を全身から放つウェズ。
光が収まる頃には、金の目をした黒髪の少年が不機嫌そうに腕を組んで立っている。
まあ、普通の人間と言うには容姿があまりに美しすぎるのだけど。
初めてウェズが人型になったときは、思わず呆れてしまったものだ。
本当に人間のふりをする気があるのか、と怒鳴ったほどに。

「こんな美少年に、乙女のお尻に敷かれる趣味があったなんて知らなかったわ。」
ぼそっと言っただけなのに、やはり人外の彼は聞こえていたようで、じゃがいもの蔦をにぎったまま私の方に振り返った。
その勢いと急に力が入ったせいで、途中で蔦がちぎれてしまっている。
まあ、ウェズの力ならどんなに短くても簡単に引き抜けるだろうけど。慣れたものだ。

「ちが、あれは……っ、くそっ。」
舌打ちをして再び蔦をつかんだウェズに、私はふっと微笑んだ。
出会ったばかりはあんなに無表情だったくせに、最近は口数も増

え表情もわかりやすくなった。
それに、ずっと優しくなった。

「わかってるって、私が危ないと思ったんでしょう？」

私の言葉にウェズがちらりと目線だけこちらに向ける。
そして肯定も否定もせず、また視線をじゃがいもに戻した。
からかってはみたけれど、ウェズがなんでわざわざ私をかばったのかは分かっていた。
シンメノリーの根を掘り起こしていた時のスコップは、ちょうど私の尻餅をついた場所のあたりにおいていたのだ。
ウェズが庇わなかったら、多少痛いか食い込んで恥ずかしい思いをするところだった。
黒龍が人間のお尻を庇うなんて、誰も信じてくれないだろうけど。

「ありがとね。」

手が届くなら頭を撫でてあげたいが、私の手は土で真っ黒。
代わりにたっぷり感謝の念をこめてお礼を言ったのだが、ウェズは聞いているのかいないのか、黙々とジャガイモを掘り起こしていた。

可愛いやつめ。
汚れてさえいなかったら思いっきり抱きしめて髪をわしゃわしゃしてやるのに。

勝手にウェズにのびようとする手を意志の力で押さえつけ、私は右手につかんだシンメノリーをじっと見つめた。

濃い茶色の頭身、うっすらと生えたひげ、枝分かれした美しいフォルム。
ああ、なんて立派なシンメノリー！
私の頭はすっかりこの根をつかった調合の方法で埋め尽くされていた。
浮き立つ気持ちをそのままに、大木の下に構えた住み慣れた我が家へと走る。
ウェズがそんな私を見つめていたことなど、全く気づくはずがなかった。

2

かたん、という音がして振り返ると、ウェズがきゅっと眉間を寄せて壁に寄りかかっていた。

腕組みをしたまま、暗い中でも光っているような金の目でこちらをじっと見ている。

不機嫌ではなさそうだが、ご機嫌でもなさそう。

窓から外をみると、いつの間にか空が明らんでいる。畑から帰ってきたのはお昼過ぎだったはずなのに。

「いつからそこにいたの？」

「……スープ、作ったから来い。」

ウェズはそれだけ言うと壁から体を起こし、部屋から出て行った。

子供のくせに、妙に威厳があるんだから。

私は小さく嘆息すると、すり鉢の中の粉末を皿に移し、立ち上がった。

うう、腰が痛い。

ぐっと腰に手を当てて、右足を後ろに伸ばしてストレッチする。

ついでに上半身を回すと、ドアの向こうで立っているウェズと目が合って慌てて気をつけの状態に体を起こした。

ウェズが無表情で私の服の袖をつかんで引っ張っていくのにまかせ、ついていく。
ちょっとー、そんなに引っ張ったら伸びちゃうんだけど、とは思いながらもなんとなく大人しく黙っておく。　たぶん何か話があるのだろうことはその表情から察せられる。

広間（部屋自体全部で3つしかないのだが）に入ると、スープの良いにおいが部屋に漂っていた。
台の上で鍋がことことと揺れている。
そちらにいこうとした私を、ウェズはむりやり机の方へと引っ張ると、一歩後ろに下がって優雅な仕草で椅子を引いて見せた。

いつも思うけど、どこで覚えたのよ、その作法。
まあ、今日は座ってろ、ってことなのね。

はいはいと言って椅子に座った私を見て、ウェズはそのまま鍋の方へと向かう。
ちなみに作業場からここまで会話一切無し。

口数は決して多くない子だけど、最近は必要なことはちゃんとしゃべる子になった。
だというのに、何かあったのかな。

12歳そこそこの見かけの男の子を働かせて私が座ったままというのは落ち着かないんだけど、とウェズの彫刻のように整った顔を見ながら考える。

ジャガイモ運ぶのそんなに嫌だった？
でもいつものことだし、私が半分悪戯で袋を持ってきていないの

にも気づいているはず。
お尻の話でからかったから？
思春期の男の子は難しいと本に書いてあったし…。
もしかして、照れくさく思っているのかも。
女の子のお尻に触っちゃったけど、どうしよう、みたいに悩んでるのかも知れない。

だからスープつくってご機嫌伺いってやつなのね。
私は気にしていない、って言ってあげるべき？

いろいろと考えている私の前に、クリーム色のスープが入ったカップが置かれた。
ウェズも自分のカップを持って向かいに座る。

私が教えた料理の中で、唯一ウェズが上手に作れるようになったのが野菜とミルクのクリームスープ。
今日はジャガイモとにんじんが入ってる。力んでしまうため包丁がもてないウェズが、手でちぎった形のバラバラな野菜がころころと浮いている。
ウェズが私に注目しているのが分かる。
私は微笑みそうになるのを抑えてスープを口に運んだ。

「美味しい。」
ありがとう、という気持ちをこめてにっこりと笑いながら言うと、ウェズは心底嬉しそうに金の目を細めてと微笑んだ。
思わずどくん、と心臓がはねる。

なに、何、なんか生意気。

ウェズは子供なのに。

たまに、びっくりするほど色気がある。
気持ちをごまかすようにスープを飲み干そうとすると、ウェズが一口飲んだスープを静かに机に置いたのが分かった。
「昼間の話、覚えているか。」
真剣そうな声色に、私もスープを置いてウェズを見る。
昼間の話？
やっぱ気になってたのか、お尻……
「薬の話だ。」
すこしむっとしたような声でするどいつっこみが入る。
私の心の声は口に出ていたらしい。

「なんで村の奴らに薬を無料も同然で渡す必要がある。もう何度も言ってきたはずだ、貴女にそんな義務はない。」
「ああ、その話。」
私は心の中で大きく嘆息をして、カップを手に取った。
昼間、シンメノリーを引き抜く直前まで続けていた話。
月に2，3回、森の入り口のすぐ近くに位置する私の家に近所の村の人間が近づいてくることがある。
昨日はその日だったのだ。
斧や鍬を担いだ男達が5人、私の家に来て小麦と服を投げ渡した。
代わりに、熱病と水疱瘡、腹病などの薬を掻き持ち、帰っていっ

た。

ウェズはここで暮らし始めてから、何度も、私よりも村人達に怒っている。

「無料じゃないわ、代わりのものは貰ってる。明日はパンが作れるわよ。」

「…そんなもの、薬の価値の１０分の１にも満たないことわかっているんだろう。」

分かってるわよ。

私はスープを飲み干した。渡してくれたときより、スープは少しだけ冷たくなっていた。

ウェズは、私への不当な扱いに対してすごく怒っている。

ここを移動しよう、と何度も言ってくれた。何なら村人達に報復するとさえ言ってくれた。

もう昼間話は終わったと言ったからウェズは今躊躇しているが、私がこのことに関して何か言えばきっとたくさん言葉を重ねるのだろう。

そのことは分かっている。

そして、それがどんなに私にとって救いになっていたか、彼が今後分かることはない。

3

「さて、私からも話があるのよ。」

そう言って立ち上がると、ウェズは眉を寄せて怪訝そうに私を見上げた。それににっこりと笑いかけて作業場へと戻る。

机の上には、夕陽に照らされた紫色の液体と真っ黒な粉末が淡い光を放っていた。

いままでの人生の中でも、最も良い出来だと思う。

私は少しの間それを見つめてから包み、布袋に入れるとそれを持って広間へと戻った。

スープを飲みながら横目で私に目を向けたウェズの前に、袋を置く。

「これ、ゲルディオの療薬。懐かしいでしょ。」

ゲルディオとは、世界最強の龍でも死に至る猛毒。

ウェズは約1年前、この毒を受けて弱っているところを私が保護したのだ。たまたま薬をもっていたからなんとか助けられたけど、そうじゃなかったら危なかった。

シンメノリーの根からわずかに抽出できるエキスが必要で、調合も特殊なため法外に高価なのだ。

ウェズが説明を求めるかのように器用に片眉をあげて見上げてきたので、私はひらひらと手を振った。

「これ持って行ってよ。私にはこれくらいしか出来ないけど、今まで楽しかったわ。」

私の言葉にがたん、と音を立ててウェズが立ち上がった。
これは珍しいことだ。ウェズは動作に音を立てることはしない。

「どういう意味だ。」

無表情だが、私の目線より少し下にある金色の瞳が、燃えるように揺れている。
とまどっていて、怒っていて、少し悲しんでる。
瞳を見るだけでそれが分かるほど、私たちは長く一緒に居た。

「もう、治っているでしょう。患者さんは、いつか退院するものでしょう？」

私は突き放すようにふんわりと微笑んだ。
そう、相手は龍、それも黒龍だ。半年前には完治していた。いつでも龍の谷に戻ることが出来るのは、たぶんお互いに分かっていた。
それをしなかったのは、私の生活を見ていたウェズの優しさだ。
そして私の甘え。
ウェズがいなくなったら、私が一人になるのが分かっていたから。
他人と少し違う能力と、少し違う見かけのせいで人間に受け入れられにくい私を知ってしまったから。

でもそれももう終わり。

「ウェズ、私は龍のことをほとんど知らない。でも、ウェズが黒龍というだけでなく、普通の存在では無いことくらい分かってる。」

その言葉にウェズは一瞬だけ目を瞠って、私を睨みつけた。

人間離れした美貌。

いちいち気品のある所作。

昔一度だけ会ったことのある龍は、私にいつか語った。

『龍の王族は、人間でも人型を一目見れば分かるぞ。』

その通りだ。

ありえない、という思いからあのときは怒鳴ってしまったけれど。

ウェズが最初に人型になったときから、私は分かっていた。

「でも勘違いしないで。ウェズが王族だから助けたわけではないから。」

「そんなことは分かっている。貴女がそんな器用な人間ではないことくらい、もう分かっている。」

どれだけの間側に居たと思っているんだ、とウェズが吐き出すように言ったことに思わず苦笑した。

永久に近い時を生きることが出来るという龍のくせに。たった1年のことじゃない。

今は別れを惜しんでくれたとしても、龍の谷に戻ったら私のことなど忘れてしまうのでしょう？

「それで、手切れ形としてこの薬か。俺がいるのが迷惑になったのか。」
「手切れ形って。」
苦笑する私を静かに睨みつけたまま、ウェズは動かない。
私はウェズを見ていられなくなって、きゅっと背を向けた。
迷惑なわけがない。
家族がいたことのない私に、初めて家族のような感情を与えてくれた人。

「今日は、疲れたから寝るから。なるべく早く帰…っ！」
ぐいっと袖を後ろに引かれ、布が裂ける音がした。
文句を言おうとして振り返り、淡く光る金の瞳に体が硬直する。

【リーゼロッテ】

どくん、と心臓がなにかに捕まれたように苦しくなった。
ウェズに名前を呼ばれたのは2度目だ。
名前を教えたときに1度だけあったが、そのときウェズは龍にとって異性の名を呼ぶというのは特別なことなのだと言ってそれ以降口にしなかった。
だけど今のは、何かがあのときと違った。ウェズの声であって、声じゃない。
耳からではなく、心に声が響いたような気がする。
それに、私はウェズの金の目に捕らわれたかのように、全く身動

きできなかった。

「貴女が俺から離れようとしても、俺は貴女を離さない。
たとえ貴女が嫌がろうとも。」

そのとき初めてウェズの右手が私の腕をつかんだ。
力加減が出来ないからな、と寂しげに笑い、ウェズが私に触れることは今まで一度もなかった。
確かに今私をつかんだ腕はすさまじい強さだった。腕が折れたかも知れない。
でも私は身動きはおろか、苦痛の声を漏らすことさえ出来なかった。

そのままぐっと腕をひかれ、ウェズの方に倒れ込む。
ウェズの左手が私の腰に回ったのが分かった。
少しだけ私より背の低いウェズの唇が、私の耳の真横にある。

生暖かい感触が耳たぶを包み込み、ぞくりと何かが体を走った。
次の瞬間、吐息と共にウェズの声が私の耳に吹き込まれた。

【貴女は、私のものだ。】

ぐっと何かが私の中ではじけた瞬間、頭を引き寄せられて唇がウェズのそれと重なった。
呪縛が解けたように体が動けるようになったのは分かったけれど、なぜか抵抗しようとは思えなかった。
隙間から入り込んできたウェズの舌が私の口内を蹂躙し、唾液を

流し込んでくる。
生まれて初めての強い刺激に足に力が入らず崩れ落ちそうになった私を支え、ウェズは目を見開いたものの、色気たっぷりににやりと笑って再び目を閉じた。

じゅっと音をたてて舌が吸われたと思うと、何かがウェズの舌から私の口の中に移されたのに気づいて身をひくが、ウェズは離そうとしない。
息が苦しい。
酸欠と刺激でがくがくと足が震え、私は思わずその何かを飲み込んだ。

同時にウェズが唇を離す。
お互いに息を乱しながら間近で見つめ合う。
ウェズが私を支えながらふっと笑ったので、私はその色気に頬が紅くなる自分が分かった。

こ、子供相手にっ…！
なんなのこの色気……っ！

悪態をつきたくなるのを、力が入らない体に免じてこらえ、きっとウェズを睨みつけた。

「な、なに、今の…っ！」
「龍の契約。」

しれっと涼しい顔で答えるウェズ。
龍の契約など聞いたことの無かった私は、なぜか聞いてはいけない予感がばくばくとしていたけれど、おそるおそる聞いてみた。

「龍の契約は、お互いに名を呼び合い、雄が雌に求婚して自分の命の欠片を渡すことで成立する。リーゼの命ある限り、ずっと俺が愛し護ることが契約として交わされたんだ。」

今まで見たことの無いほど嬉しそうなウェズの顔にきゅっと苦しくなった胸のせいで話が耳に入ってこなかった。

その腹が立つほど色気たっぷりな顔から目をそらし、子供のくせに子供のくせにと思いながらもその言葉を咀嚼する。

契約ね、契約…。求婚、命、愛し……護る？

「……は？」

ぼんやりと熱に浮かされていた頭に、急に水を浴びせられたように感じた。

呆気にとられて見上げても、ウェズの目は冗談を言っているようには見えない。

「何言ってるの？」

「本当は分かってただろ？俺がずっとお前を見てたこと。」

私はきゅっと唇を噛んだ。

たまに、いや、いつも、ウェズがどうしようもなく優しい目で私を見ているのは分かっていた。

私の無茶にもしょうがないな、と慈しむような声で手を差し出してくれていることも。

時々眠る私の唇に優しく重ねることにも、気づいていた。
でも、私のエゴのせいで、それを言わなかったせいで、私は少年にとんでもない過ちを犯させてしまったのかも知れない。
まだ間に合う。
言わなくては。

「あのね、ウェズ。それは私を好きとかそういうのじゃないのよ。」
私はじっと彼の目を見つめたまま言った。
「私があなたの命を助けたのがきっかけで、勘違いしているの。それはよくある一時の感情に過ぎない。ウェズの気持ちはすごく嬉しい。でも、そんなので長い時の契約なんて交わしちゃ駄目よ。まだ契約が完全じゃないうちに、思い直して。あなたは、あのね、今は分からないかも知れないけど……、きっと大人になったら分かる。そして、私のことなんて忘れるわ。」
いや、龍の谷に戻ったらすぐにでも我に返るかも知れない。
怒るかと思ったのに、ウェズは穏やかな目で私を見つめたままだった。
何かを見透かされているような目に、居心地の悪さを感じて少し身をよじる。
「言いたいことはそれだけだな？」
感情の読めない声にこくん、と首だけで肯定する。
その私にウェズは手を伸ばして頬を撫で、優しく髪を掻き上げたかと思うと――――――――――ばちん、と指で額をはじいた。

「いっ、いったーいっ！！」

ウェズの腕から落ちて床にへたり込む。

はじかれた場所がひりひりする。

なに、なんなの？

ウェズは頭が痛いとでも言うように自分の額に手を当て、はあと大きく嘆息した。

そして座り込んでいる私を見下ろし、いいか、よく聞いておけ。と椅子に腰を下ろした。

「まず1に、そんなくだらん理由で感情を動かすほど俺は愚かじゃない。大体それは人間だけにあてはまる特性に基する。第2に、契約は完された。違うことは誰であろうと許されん。第3に、常に言っているように俺は子供ではない。」

命令に慣れたようなその口調に、私はぽかんと口を開けてウェズをあげていた。

いろいろと聞きたいことがあるのに、何一つとして口に出来ない。

「リーゼロッテ。」

ぐいっと腕を引っ張られ、気がついたらウェズの膝の上にいた。

私の銀の髪をひとすくい手にすると、愛おしそうに口づけ、そのまま引っ張る。

痛いと口にする間もなく、かみつくように唇が重ねられた。

その合間に、ウェズが息のきれた私に囁く。

「俺もお前も、一生互いを忘れることは叶わん。」

その言葉を聞いたのを最後に、私の意識は闇の中へと落ちていった。

4（前書き）

次話、消してしまった……！！
次の話で解決、リーゼ編完結。
まあネタ晴らしってほどでもないんですけど、色々突っ込みどころは分かっている場所は分かっているんです。
その解決編をノリノリでかいたのに全消し……！
今日は力尽き。
もしかしたらリーゼ最終話よりウェズの話が先に……。
ウェズ編で傲慢なウェズをリーゼが手なずけるんです…。
書いてて楽しいんです…。

4

目を開くと、染み一つ無い真っ白な天井が目に入った。
ああ、天国かともう一度目を閉じようとしたけれど、ウェズの事を思い出してぱっとはねるように起きあがる。

あのえろがき……っ！！！
今度会ったらただじゃ……。

そのときになってやっと部屋の様子が目に入り、私は体中の血液がさっと冷めたのを感じた。
恐ろしすぎる。
恐ろしく、広く、しかも高い。

私は昔からお金持ちの家は広さではなく天井の高さから察することが出来ると考えてきた。
だから、その調度品の高級感や心なしか扉が小さく見えるほどの部屋の広さよりその天井の高さに唖然とした。
私の基準によると、ここは軽く王の部屋よりもお金がかかっているかもしれない。
しかもただの寝室に見えるのに、だ。

なんなの、ここどこなの？

ウェズが関わっているのはおそらく間違いない。
それならば、もしかすると、もしかするとだが、ここは……！

「目が覚めたか。」

聞き覚えがある声がして、私は思いっきり叱りつけようと振り返り、慌てて口を閉じた。

ウェ、ウェズじゃない…。

目の前に立っていたのは、１２歳の少年ではなく、色気たっぷりの大人の男だった。
深い金の瞳と艶やかな黒髪、彫刻のような恐ろしい美貌は一緒でも、ウェズの背は私よりわずかに低い。だがこの男はたぶん、私より頭一つ分は高いだろう。
お兄さんでもよこしたのかもしれない。私に叱りとばされるのが怖くて。
さすがの私も弟の不始末を兄にあたるようなことはできない。

「お、お邪魔しております。」
「……いや、気にするな。」

男は柔らかく目を細めて楽しそうに笑った。
ウェズとそっくりの笑い方に思わずどくりと胸が跳ねて目をそらす。

これが大人の色気ってやつか！
美形だからって、みんなにときめくなんて、いつから私は……！

それもこれもウェズのせいだと何度も口の中で悪態をつき、居場所を聞こうと男に視線を戻したとき、目の前に男の顔があるのに驚いて思わず体が倒れる。
そのまま優しく両手がベッドにぬいつけられて覆い被さり、私は慌てて抵抗しそうになった。

エロがきの血縁者はエロ男かっ！

けれど、その金の瞳をみて動きが止まる。彼は優しく私を見つめていた。
その眼差しには、見覚えがあって。
生まれて初めて、愛しくて仕方がないと言いたげな瞳を私に向けてくれた人。
思わず彼の唇に目がいく。
そう、ウェズが大人になったらこんな感じ……。

そのとき、ぱちん、とウェズと目の前の男の面差しが重なった。

「ウェズ、なの？」

声が震える。
なぜか、確信があった。
男はふっと笑うと、私の額の銀の髪をかき分け、そこに口づけを落とした。
そしてまっすぐ私の目を見つめる。
「俺の名前、ちゃんと覚えてる？」

「え？」
「俺の名前。」
困惑して男の顔を見上げても、男はただ私を見下ろし、やさしく私の頬を何度も撫でるだけだった。
その手を感じながら、黒髪の少年が真剣な顔で私に告げた名前を思い出す。

「えっと…【ウェズディード】」

そう言った瞬間、どくどくと何か欠けていたものが私に嵌るように、言いようのない熱が全身を駆けめぐるのを感じた。
熱い。
熱い。
何かが、変わる。

なぜか顔が見たくなってうっすらと目を開けると、ウェズが同じように苦しそうな顔で汗を浮かべながら私を見ていた。
満足そうな、熱に浮かされた顔。
なんとなく、すべてが正しい形に収まったような気がした。

「一生、愛してる。幸せにする。」

幸せそうに笑うその顔に、私はすべてを委ねた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1425z/

龍の契約

2011年12月5日00時48分発行